
続・銀行員の恋

深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・銀行員の恋

【Nコード】

N8331F

【作者名】

深夜

【あらすじ】

新設される事になった部署に転勤になった田原聡。同僚は全員が女性であり、たったひとり放り出された彼の七転八倒物語。前作より2年後の世界で、彼とみどりはどうなったのか。毎週土日、午後9時～10時頃更新します（あやしい）

プロローグ（前書き）

前作より2年が経過した田原聡は・・・

ブログ

斎藤みどりの姓が、田原に変わった日から1年が過ぎた。

一言では説明が出来ないほどの宿題を抱えている状況は、相変わらずだ。

でも、ひとつひとつ階段を昇っていくかの如く宿題のページは減らしてきたつもりなんだ。

『婿入りか、娶るのか』

この答えひとつにしても、過程は複雑だった。

宿題の答えが、新たな宿題を生んでしまう。

なかなか最終ページにたどり着くには到ってない。

そんな毎日の中、銀行員としては当たり前の事であるが、いつものアレがやってきた。

辞令 田原聡

あんしん銀行営業推進部個人資産課課長代理を命ずる

本店がある福山市。

人口40万程度の地方都市だ。

最初に思った事は、「転居する必要がない」だった。

転勤が宿命の銀行員にとって、引越なんて事は、いつもの事なのだ。

さわやか銀行から戻ってから、本社勤務で営業戦略を企画する仕事に就いていた。

銀行は、支店のような営業店のイメージしか思い浮かばない人が多いことだろう。

僕だって、銀行にいらながらも同じ思いだった。

しかしながら、千人規模の会社であれば総務や事務といった後方部署が必ずある様に、

銀行にも『銀行員』でありながら、経理職を専門にしている人が多く存在している。

現場の経験の無い人は少数で、大抵の人は営業店の経験をもっている。

後方と言っても『お札』を人並み以上に数える事は出来る訳で・・・

その点では、やはり『銀行員』なんだろうな。

『秘書課』の様な特殊部署には営業店経験の無い『銀行員』はいるのだろうけれども、

数からすれば極めて少ない。

「おもいがけない転勤だったね」

そう声をかけてくれたのは直属の上司、小林調査役だった。

「短い間でしたが、お世話になりました。でも、フロアが違っただけですから、

なんか転勤って実感が無いです」

転勤の発表では上司は部下の顔色を伺うんだ。

転勤には大きなストレスがかかる訳で・・・

精神的なケアともう1つの理由の為。

不正をしている事を隠蔽しなくてはならない行員は、

転勤発表時にあきらか通常とは違う表情をするらしい。

プライベートでの課題は満載だが、仕事はそこそ順調なわたくし。

そんな面接というか、儀式を無事にクリアした様子だ。

「そうか、個人資産のコンサル業務が新設なるみたいだから、大変らしいが頑張ってくれ」

移動する個人資産課つてのは、長沼女史が在籍している部署だ。

投資信託や年金保険、生命保険に損害保険。

銀行業務では最近になって取り扱いを始めた商品を管理している。

具体的に何をやっているかというところ……実際のところは良く解らなかった。

しかも新設する部署であるかのような話だ。

何を仕事とするのかは誰に聞いても解らないだろう。

「ああ、そうだった」

小林調査役が思い出して振り返る。

「今回立上げになるコンサル部門は総勢15名。全員が営業店から補充されたそうだ」

正確には、僕以外の全員がって事だろうな。

もつとも、僕だって営業店を離れて2年経っていないけど。

「田原君以外の全員が女性だそうだ」

ちよつとまってくれ!!!!!!!!!!!!!!

銀行の女性は4人集まれば間違いなく2つの派閥が出来るくらい、

強烈な個性を持ち合わせている方が多い。

年齢など関係なく『お局様』の風格を持ち合わせているくらいじゃないと、

やっていけないらしいからな。

それが僕以外14名・・・

「すつ、すいません。なんで男は僕1人なんですか……………」

転勤を拒否する事は出来ない。

組織の人間の宿命であり、人事は「ひとごと」なのだ。

「何故って、そりあ選ばれた訳よ田原ちゃん。

男の中で仕事の出来る女性は少なからずいるだろうけど、その逆は中々いないからな」

確かにそうだろうけど、僕だって同じだと思っただけど・・・

「まあ、ハーレム状態とまではいかないだろうが頑張って」

調査役の顔はまじめだが、目は笑っている（怒）

「いいじゃないか、女性達から責められるのも」

「・・・はっ？」

「責められ弱さを見せれば、母性本能撥るかもしれない・・・」

強さを見せれば、フェロモンを発するかのごとく刺激を与えられるかもしれない・・・」

「・・・・・・・・」

「私はそんな職場で責められたい・・・」

そう最後につぶやきながら調査役は立ち去っていった。

結局、構成人員が僕以外は女性であること以外要領は得なかった。

どのような部署であるか不安は無かったはずなのに、

それを聞いた瞬間から、無事ではすまないだろうとの大きな不安が生まれてしまった。

「小林調査役、間違いなく『ドM』ですね・・・」

どうでもいい情報も手に入れてしまった。

報告

「あのね、転勤になったんだけど」

本来であれば、新所属長に挨拶するのが先なのだけれども、

新設される部署では、誰がトップであるのか良く解らない。

営業推進部といっても、そこにぶら下っている『課』は複数あり、

新設部署との情報ならば、『課』の下に『担当』とかのプロジエクト名がつき、

独自の組織となるのだ。

人事発表には、「営業推進部個人資産課」とまでしか記載が無い。

15名が召集されたと聞いたものの、銀行全体でその数なのか、

本店所在である、福山市地区だけでその数字なのかさえわからない。

人事の名簿を見る限り、「個人資産課」への転出は全員で50名程度いる。

だから、後者である可能性が高い訳だが、今の段階では想像でしかない。

「引越すする必要は、ないみたいなんだけど」

その言葉を聞いた瞬間、受話器越しの『みどり』から、安堵の気持ち伝わってきた。

僕達と一緒に生活するようになって、引越は2回経験している。

まずは、東京に転居した半年間。

そして福山市に1年間。

銀行の都合でどこに行くかわからない不安は夫婦同一である。

せつかく慣れたところでの転居は、精神的にも辛いだろうな。

いままでの引越しても、僕が気がつかないだけで、そんな思いをさせていたのかと、

胸の奥をぎゅっとなにかにつかまれる。

「詳しくは帰ってから話すから・・・」

転勤の事実だけしか報告できない訳で・・・

もっと詳しく知りえてからの方が良かったのだろうか。

転居しないから、彼女に対しても影響が少ないと、軽く考えすぎていたのかもしれない。

「奥さん、心配してるのかい？」

そう話しかけてきたのは、同じ企画課の同僚、荒川代理だ。

「はあ、なんか元気なかったみたいで・・・」

荒川代理は、僕より4つ年上の先輩だ。

とても温厚な人柄で、誰にでも好かれる行員であるが、

お酒にはだらしが無く、酒乱系の悪癖があるらしい。

その為、昨年奥さんから三行半を突きつけられ、バツイチになったとの事。

彼と酒席を共にした人からは、いずれも日中の人格を疑われてしまいうらしく、

『ばってん荒川』と呼ばれている。

「そういうの、良くわかるなあ。田原ちゃんみたく、

短い間での転勤が続くと、いろいろ考えてしまっからな、女ってヤツは・・・」

『いろいろ考える』

それは確かに否定できない。

そういわれてみれば、気になる事もあった。

企画部配属になり、帰宅時間は9時過ぎる日がほとんどだったが、

夕飯は、必ず一緒に食べていた。

でもここ2日間は、10時を過ぎた事あって気にしなかったが

先にすましたと、一人で食事をした。

待ってもらうより気は楽なんだけれども、

それも彼女からのメッセージだったかもしれない。

「どうよ、今晚酒でも飲みながら、そこらへん教えてあげようか？

時には男の存在感を出してやらないと、いつまでも奥さんの尻に
しかれるぞ」

通常転勤発表の日にお酒はつき物だ。

でも、今は早く帰って、みどりに逢わなくちゃならない。

それに、荒川代理のお酒はとてもじゃないが、ひとりでは付き合えない。

「すみません、今日は『バツ』です・・・」

「そうか、じゃまた今度ね。送別会だ」

思わず『バツ』と言ってしまったが、あっさり引き下がる荒川代理。

「でもな、田原ちゃん・・・」

ふてくされている女には、強気で責めるのが効果的だぞ・・・」

・・・ばってん荒川、彼はドS。

またどうでもいい情報が手に入った（汗）

帰宅

「ただいま・・・」

7時前に帰宅したのは何ヶ月ぶりだろうか。

それだけの時間、みどりをほったらかしだったような気分にもなり、不安は募った。

「・・・あれ？おかえり。早かったねえ。ご飯まだ出来てないや」

帰宅してみどりの顔を見る限り、

電話越しに覚えた違和感は、微塵も感じない。

ネクタイを緩めながら、さり気なくみている程度では、普段どおりのみどりである。

「・・・杞憂だったかな？」

銀行員のアンテナも作動しない。

「転勤になっちゃってさ・・・」

「びつくりしたけど、同じ本社勤めなんですよ？」

引越しが無いのなら助かるナ、今は・・・」

今は・・・って、やはりなにかあるんだな。

さて、どうやって切り出したらいいのだろうか。

そう考えながらも、とりあえず知りえる転勤先の話をしてみたんだ。

「聡さん以外は女性ばかりの部署なの？」

「今のところはそうじゃないかって程度の話だけど・・・」

「・・・」

「大丈夫だよ、ベテランが多いって話し出し、

銀行の女性達は気が強い人たちばかりだから、艶っぽい話になんかならないから」

「だから心配してるんじゃないの・・・」

僕は、銀行の寮に住んでいる。

4階建ての3LDK、家賃1万円。

ここら辺の相場では、10万円以上はするだろうから、

自己負担1万円なんて環境には、とても恵まれている。

それに本社まで、徒歩15分なんだ。

社宅は、ほとんどが男性銀行員とその家族が住んでいる。

女性でも結婚しているひとは数多くいるが、大抵旦那さんが仕事を
している訳で・・・

そちらの会社に住まいは面倒になる慣例があるのだ。

中には、主たる給与所得者が、女性行員であるご家庭もいるはずで
あるが、

社会的体裁を保つ為だろうか、女性行員の家族が入寮しているなん
て事は、聞いた事が無い。

寮にいる男性行員の妻が、元銀行員である可能性は4〜5割と非常
に高い。

職場内の恋愛は高い職種といえるだろうな。

現在入寮している「あんしん寮」は、築20年。20世帯の銀行員
家族が暮らしている。

そして、妻が元銀行員である世帯が、10世帯。

典型的な『銀行員』の巣窟である。

「この寮でも、目立つ人ってゆーのは、絶対元銀行員なんだよ

301号の林さんなんて、会話したこと無いけど、元銀行員でし
よ」

「・・・その通りです」

「見ただけでわかつちやうなあ」

やはり僕がいない日中、同じ寮の元お局様達から、

相当プレッシャーをかけられていたのだろうか？

今まで何故その事に気づいてあげられなかったのだろう。

お嬢様育ちで、所帯じみた生活など無縁だったはずのみどり。

けれども結婚してから、けして世間ずれした素振りなど見せなかった。

家事もそつなくこなし、銀行の人たちとの生活にも良好な関係にあるとばかり思っていた。

どこかの総理大臣のように、

『生まれは良いが、育ちが悪い』

なんてことは無かったんだろうな。

・・・僕は同じだったから、なんか共感できるけど。

あの父親の娘なのだから、厳しく育てられたのは間違いないのだけれども、

まったくスレたところはない。

だから、みどりは普段愚痴など口にしたことなど無かった。

「ごめん、そんなに暮らしにくかったとは思ってもなかった・・・」

「えっ・・・ああ、ここには不満無いよ、だから引越ししなくて喜んでるの」

喜んでいる？

たしかに、この寮に不満となれば、今の転居は困るって言ったこととは矛盾する。

「銀行員には、強烈な個性をもった女性が多いって事を言いたかったの。」

ここ寮の元銀行員の奥さん達は、とってもいい人ぞろいよ。目立つけどね」

そう言いながら、はにかむように笑ってみせるみどり。

「でも、結婚して銀行辞めたからココにいるわけでしょ？

そうじゃなく銀行にのこっているベテランの人たちならば、

もっと個性がある人たちなのかなって思ったの。

そうだとしたら、聡さん大変だろうなって・・・」

たしかに、銀行のお局様の個性は強烈だ。

14名の女性達が集まれば、どのくらい複雑な派閥争いが起こるか。

想像しただけで、背筋が凍りつく。

『おつぼねーず』

お局様の複数形を、銀行ではそう呼んでいる。

『ハルマゲドン』

同じ意味だ。

「とにかく、引越しが無ければ私は満足よ。ご飯の支度するね」

『今は・・・』

その答えを聞かぬままみどりは台所に入ってしまった。

違和感の答えは、そこにありそうだけれども、アンテナは作動しない。

「面倒なとき、出前とっちゃおうか？」

「・・・ホントに？1人だと頼めないから、

デリバリーって楽しみなの。何にしようかなあ」

無邪気に笑うこんな姿を見るたびに、

世間一般のレベルで生活させている事に対しての罪悪感から開放される

この思いがある限り、僕は『妻を娶る』という事に、

『仮』の烙印を押されているのだろうな。

「ピザでもいい？ 聡さん」

「何でも良いよ」

「そっかあ・・・じゃこれでいいかな？ サイズはつと・・・」

「・・・【L】にしてくれ。【S】や【M】は腹いっぱいだ」

特命

辞令が出た翌日、個人資産課の大崎課長から電話が来た。

課長といっても、支店長より職位は高い。

銀行の職位は極めて複雑だ。

僕の「課長代理」という職位も、世間で言うところの「係長」である。

その他にも、本社には「調査役」「推進役」「審査役」なる職位もあり、

それぞれ「課長」から「支店長」待遇の職位である事が多く、幅も広い。

つまり、支店の課長と本社の課長は兵隊の位は大きく違うということだ。

なんでも至急で申し訳ないが、今日の午後3時から、本社6階の会議室において、

新設される「ファイナンシャルアドバイザーグループ」の説明会があるとの事。

ずいぶん長つたらしい名称の為、『FA』とよばれるらしい。

昨日のみどりの言葉も気になったが、同僚となる女性陣も気になる

ところである。

「さて、皆さん。急な辞令で驚かれたでしょう」

そう切り出したのは、個人資産課の上部組織である塩田営業推進部長だ。

なんでも、当行が弱いとされてきた、投資商品のアフターフォローと、

販売推進に特化した部署を新設し、その特命係として、

今回の招集されたメンバーに白羽の矢が立てられたのだとか。

徐々に緊張も解け、女性人の顔を見渡すと、誰一人として知っている人がいなかった。

もちろん、名前を聞く程度の知識は持ち合わせたものの、

一緒に働いて、気心の知れたひとはいない。

流石に、女性が14名集まると、なんとも言われぬ独特の空気に包まれる。

年の功は、一番上の人で40歳になった程度だろうか。

下で30歳くらいに見受けられた。

少なくとも、入行間もない初々しい行員などは1人もいない。

間違いなく、百戦錬磨の女性行員たちである。

「・・・みどりの不安が当たっているな」

重苦しい雰囲気を感じたのだろうか。

「みなさん、仕事は楽しくやりましょうね。楽しくないと、仕事じゃないですよ！」

塩田部長が、柔らかい口調で話し始めた。

百戦錬磨といっても、誰でも配置換えは緊張するものである。

それは、この場のメンバーでも同じである。

さらに個人的に質問などの雑談に入る中、塩田部長が話しかけたのは、

宇多川ゆうか主任だった。

「おっ、宇田川さん。この間はどうもね」

「・・・はっ？」

「フィットネスのプールですれ違ったじゃないか」

「部長、あそこの会員なんですか？」

「おお、気がつかなかったかい？ 凄い際どい水着だったから声かけ

ずらくてさ」

顔から日が出るんじゃないかって思うほど真っ赤になる宇田川主任。

まあ、場を和ませるには身近な話題は効果できであるけど・・・

「部長、水着の話はセクハラです・・・」

そう割って入ったのは、氷の視線をもって女性だった。

誰だろう、見たこと無い人だな・・・

和やかだった雰囲気が一瞬にして凍りつく。

「川田みさこ代理ですよ・・・有名人です」

隣から教えてくれたのは、小柄でこの場の雰囲気には似つかわしくない感じの佐藤はるか。

本メンバーでは最年少らしい。

「名前は聞いた事あります・・・」

「ちなみに、宇田川主任は宇宙人です。別名『ゆうかりん』。かりん星出身です」

「・・・」

打ち合わせ中であり、それ以上の情報は聞けなかったのだけれども、

二人については、その情報で、よく理解できた感じがした。

「・・・頭痛くなってきた」

「さて、15人の集団ですから、役割を分担したいと考えています」

大崎課長から、ようやく組織の構成が発表された。

「特命チーム、リーダー・田原聡。同じくチーフ川田みさこ。同じくチーフ牧村ひろこ。」

代理3人の下に、残る人たちが参加に入り活動してもらいます。

チーム編成はリーダー・チーフの意見を聞きながら後日発表します」

・・・頭痛の種がまた増えてしまった。

「特命係ですから、大いに期待いたします」

その日の打ち合わせは以上で終了した。

「大崎課長、リーダーとチーフってどう違うんですか？」

早速質問してみる。

「基本的にみな同じですが、取りまとめ役といった点ではリーダーが上だから、」

頑張ってくれ。詳細は実是我々も良くわからないんだ。考えながら
らって事だな」

「・・・考えながらって、そんなあ」

特命係長・田原聡が誕生した。

道標

「田原君の特別任務完全遂行を祈念して、乾杯！」

声高らかに始まった僕の送別会。

お酒が入ってしまった瞬間から間もなくして、

『主賓』から『ババを引当てた不幸な男』に降格した。

会場の雰囲気は、そんな空気が充満しているのだ。

「【おつぼねーず】を指導しろなんて狂気の沙汰だ……」

会場の誰もがそのように感じている事だろう。

だから、『祈念』するのではなく、『記念』する日なのだろうな。

『かわいそう記念日』（他人事だから面白いはず）

「田原くん、FAの には気をつけろよ。 支店で一緒だったけど、

仕事は出来るけど、使いこなすにゃ……相当大変だぞ」

次々にそんな言葉が聞こえてくる。

特定のだれと言う事ではない。

14人平均的にそんな情報が入ってくる。

それだけ、「仕事ができる」人達である事は理解できた。

自分自身の仕事に対する『こだわり』を持っている人は、

上司達にはなにかと『受け』が悪い場合が多い。

『こだわり』だけで、仕事に対して『実』がならない人は、口だけとの評価になるだろう。

上司の指示より、自分の考えを主張し、実践する人は、

どんなに仕事の実績を積み上げても、適正な評価を受けない事は良がある事なのだ。

14人の全てがそうだとは思えないけど、

多くの人たちは、似たような雰囲気を持ち合わせているように感じる。

僕は、仕事に対してこだわりを持つ人は嫌いではない。

お酒の飲めない僕ではあるが、酒席に参加する事は嫌いではない。

ホソネの話が聞けるって事は、なかなかある事では無い訳で・・・

だから、こうした情報は言ってる人たちからすればお酒の上での事だから、

忘れてしまつのだろっけれども、しらふの僕には貴重な情報となる。

「いいなあ、田原ちゃん。お局さま達から責められるのかあ・・・

タイトスカートと眼鏡の似合う川田女史から、

流し目気味にキリツと言われるのはゾクゾクするなあ・・・」

・・・なかには、ドMの深さを知りえてしまつどうでもいい情報も数多くあるのだけれども、

この送別会で知りえた情報が、僕の明日からの道標となつた気がした。

今回召集された面々は、1人1人が『こだわり』を持つた、

個性豊かな集団であるのは間違いない。

個々ではなかなか評価されない境遇であつたことは、なんとなくであるけど予想された。

縁あつて同じ職場を与えられた集団となつた以上、

集団の評価が、個々の評価へと成り得る

「どの様な手段があるのか・・・それはまだわかりませんが、

僕のやるべき方向は見えてきた気がします」

送別会の御礼をそういう言葉に代えて、僕は企画課を後にした。

「・・・ただいま」

時刻は午後9時20分。

送別会の酒席は、2次会・3次会と続くのだけでも、

1次会で帰宅したのには理由があった。

みどりへの不安というか違和感というか・・・

感覚でしかないけれども、心配するところがあったからだ。

午後9時半ばだというのに、僕達の部屋は明りもが灯っていない。

・・・不安は増すばかりなんだ。

「・・・おかえり、早かったんじゃない？ちょっと気分が悪くて休んだの」

奥の部屋からみどりが眠そつな目をこすりながらやってきた。

「夕飯食べた？このごろ調子悪そつなんだけど・・・」

僕の表情はよほど心配しているように見えたのだろう。

僕の心配を否定するように、笑って見せる。

「ごめんね。気分悪いなんて言ったら心配するよね。

今日、病院に行ってきたんだけど・・・」

「病院・・・そんなに悪かったの？」

「・・・赤ちゃんができたみたいなの」

僕とみどりに、コウノトリがやってきた。

濃霧

「それでは、暫らく休憩としますか・・・」

議論が平行線をたどって、かれこれ3時間以上が経過していた。

本社の大崎課長と僕を含めたF A 3人の代理が、

これからどう活動するのかを打合せしたのは、午前9時からだった。

大崎課長が本社案を説明。それを叩き台として発展させるはずが、

あーでもない、こーでもないと始まったのには、女性集団の前途多難さが伺えた。

問題となったのが、チーム編成である。

僕を含めた15人を3チームに振り分けるのならば、1チーム5名体制となるのだけでも、

本社案には『コンサルティング窓口』の新設構想があり、

3名の窓口専属担当者を配置したいものであった。

あんしん銀行全地区でF Aが配置されたが、地区ごとに戦略や構成の事情は異なる。

本社お膝元である福山地区では、人も予算も多く使う。

今回『コンサルティング窓口』を設けるのは、福山地区だけであり、尚更のこと、議論は紛糾した。

「・・・よく喋る人だっ て聞いてたけど、あまり喋らないね。遠慮してるの?」

そう話しかけてきたのは、牧村代理だった。

「よく喋るのは、お客さんの前だけですから・・・」

赤ちゃんが出来た。

そうみどりから告げられ、僕は心の底から驚いたんだ。

嬉しい。

正直そう思った。

でも・・・

喜べない。

同じくらいの割合で、そう思った。

喜べないという感情が、心の半分を支配した事を、みどりに悟られないようにする事。

僕にとって、今一番大事な事は、そんな思いであって・・・

仕事の事など、二の次になってしまう。

いずれ親になるだろうと思いはずとあったのだけれども、

いざその瞬間が訪れてみると、こんな思いが心に表れる事は、まったくの予想外だった。

自分自身を許せない。

でも、何故そのような思いになるのか。

それも良くわからない。

見えないなにかと対峙しているのは間違いないが、

それは単なる不安からなのか、

それとも、僕は本当にみどりを愛しているのか・・・

頭の中をいろんな思いが駆け巡っては消えていく。

「・・・皆さんがどう考えているのか、聞いてみたかったですよ」

それ以上詮索されないよう、会話をさえぎるような答えを出してしまふ。

午前中の議論は、大崎課長の本社案に、ことごとく川田・牧村両女性代理が、

異論をぶつけるといったものであった。

休憩中、昼食にしようと両代理に声を掛けたが、

「私は遠慮するわ・・・」

つれなく川田代理に断られる。

「私、川田さんとは上手くやれないと思うわ。ハッキリ言って嫌い」

「・・・そうハッキリ言わないで下さい」

女性代理達は、僕より4～5歳は年上だろか。

同じくらいの年齢に思われるが、まさか女性に年なんて聞けるわけが無い。

「独身だからあなのか、あだから独身なのか。あの人の場合はどちらかしらね」

左手の指輪を見る限り、牧村代理は結婚しているのだろうな。

なんとなく、『肝っ玉があさん』タイプの匂いにする。

お昼ごはんも「味噌ラーメンとチャーハン大盛り！」って、豪快に注文してくれた。

しかも、「はじめてのご挨拶ですから、ご馳走します・・・」って申し出した後に。

一応上司となったのだから、それはいいんだけど、遠慮のかけらも無い人だな。

僕は仕事もプライベートも霧が晴れない気分であり、食欲なんて全く無いのに。

注文した日替わり定食を持余し気味な僕にとって、

そんな強欲加減は、時に羨ましくもある。

「田原さん・・・お願いしてもいい？」

午後からの打ち合わせ前に、ある程度の根回しをしたいのだろうか？

そうだとしたら、警戒に値する人なのかもしれない。

「食べないんだったら、その茶碗蒸し頂戴！もったいないから」

・・・食欲は警戒に値する。

FA

「独身だからああなのか、ああだから独身なのか」

牧村さんの一言で、当たり前前の事を見落としていたって気がついた。

この集団に、いったい既婚者って何人いるのだろうか。

30代の既婚者であれば、まだ小さな子供がいる家庭がある事は当然な訳で・・・

手がかからない程度大きくなった子供がいる家庭も踏まえて、

残業ができない事情がある人や、休みがちな事情を抱えている人なんかも、

僕レベルで把握しなくちゃいけなかった。

「大崎課長、チーム編成の前に、ご家庭の事情なんか把握しておかないと、

無理があるんじゃないですかね」

「それはちゃんと調査してあるから。人事発表後の事後調査だけだね」

課長の説明によると、結婚している人は8名。全体の半数が既婚者って事になるな。

そのうち3歳未満の子供がいる人は3人。

子供がいない人は今のところは僕だけだった。

「田原代理のところも頑張らなくちゃね」

そう言ってくれるのは、自然な激励ってヤツだろう。

でも今の僕には、嬉しさとそうでない感情の抱き合わせを思い出させてくれる、

塩でしかない。

女性達が、なにやらよからぬ方向に向かいそうなんで、

僕が決断しなくてはいけない場面だと言う事は、

始めから分かっていたのだけれども、

霧の中にあって僕にはそれが出来なかった。

でも、進むべき方向は理解しているのだ。

道標はその方向を教えてくれる。

そうして午後からの打ち合わせが開始された。

「午前中は、川田・牧村さんの意見を聞かせていただきましたので、

それを踏まえて僕の考えを言わせていただきます」

コンサルティング窓口業務は、小さな子供がいる3名を配置したい事。

班編成については、4人体制3班とし、福山地区を3分割して各代理が統括する事。

毎週月曜日、リーダー・チーフ会議を3人と本社担当者との間で定期的開催する事。

チーム構成員は、かつて在籍した支店の経験を踏まえながらも決定したい事。

その他の打ち合わせは、僕からの指示による事・・・

それぞれの理由を説明し、川田・牧村両代理からの反論を待った。

「・・・構成員以外に依存はありません」

「・・・同じです」

理論整然説明したと思ったが、午前中の二人を見る限り、意外にも簡単な同意であった。

バックオフィスは、コンサルティング窓口が設けられる、

梅ノ木支店の会議室に間借りする事は決まっていた。

僕達FAの仕事は、各支店の投資・保険商品契約者のアフターフォ

ローと、

獲得・契約にあたってのサポートが中心となる。

『FA』とは、ファイナンシャル・アドバイザー。

代理以外の構成員は、1～2店舗の担当支店を受け持ち、それを代理が統括する。

そのような組織になる事を目標として打ち合わせの骨子が固まったのだが・・・

「構成員の経験を踏まえて・・・どう決定するのですか？一番そこが肝心です」

派閥が出来る女性陣にあつて、そこをハッキリさせないで班編成することは出来ない。

しかしながら、自分の好き嫌いで仕事の『人事』を決定されては堪ったものではない。

「では、各FAの経歴を説明します。大崎課長から調べていただいております」

僕達以外のFAそれぞれの支店経験・表彰経歴なども読み上げた。

「以上を考慮していただき、構成員を決定していただきます」

「だから、どうやって？」

「……ドラフト指名していただきます」

「ドラフトって、野球の『ドラフト』？」

「ええ、今のところ、僕達以外はフリーエージェントですから……」

あんしん銀行FAドラフト会議決定。

一致

「結局お局リーダーさん達は、それで納得したの？」

銀行の事は、めったに話をしないのだけれども、

女性達を取りまとめるには、みどりの意見を聞いておきたかった。

「どんな方法を提案してみても、納得なんてする訳ないよ・・・

だから、妥協点としてどう思いつて聞きたかったんだ」

「うーん、どうだろう・・・ドラフトってリーダーさんが自ら選ぶんだったら、

比較的に不満は言いにくいんじゃない」

みどりの職場であった製薬会社も、事務所は女性達が占めていた。

だからこのような場合の意見を聞いてみたかったのだ。

それに、みどりと話をするのに、なにかきっかけが欲しかったのも、

理由の1つだったかもしれない。

体調がどうなのか尋ねても、

「全然平気から、心配しないで」

としか答えないみどり。

ご飯を食べていなかったり、早い時間から休んでいたりと、
つわりによる体調不良は間違いなくあるのだろうけれども、

僕の前ではそのような素振りは見せる事は無い。

「赤ちゃんが出来た」

間違いなく嬉しいんだ。

その話を聞いた次の日、なにかしなくちゃと、

『赤ちゃんに最高の名前をつける本』

なるものを買ってしまっ。

早すぎる気もしないでもなかったけど、いてもたってもいられなかつた。

だから『心から嬉しい』のは間違いのない事実なんだ。

けれどもそれは、全く反対の気持ちを打ち消すための偽善なのではと、

自分の事を、自分自身で疑問に思う。

『親になる事への不安』

そんな簡単に言い切れる心の様相ではないかもしれない。

「チームって事は、普段全員で顔を合わせる事はないの？」

「そうだね、打ち合わせはリーダー3人で済んじゃうから、

全員顔を合わせるのは、月に何回かになると思うけど・・・」

「チーム間で多少揉めるのが許されるのなら、チーム内で揉めない方を優先させるのに、

ドラフトっていいと思うわ」

僕の考えとみどりの考えが一致した。

全員が納得する人事などできる訳がないのだ。

リーダーさえ納得出来るならば、チーム編成は合格点だろうな。

ただ・・・

「リーダー以外の人からは、相当恨みを買つかもされないわね・・・」

正にそれだ。

特に個性の強い2人のリーダー。

彼女達からすれば、僕も相当なのかも知れないが、

評価ってのは、他人の物差しでしか計れないから仕方がない。

あの人がいいとか嫌だとかは、間違いなく起こる訳で・・・

「そのときは、どんなに恨まれても、

陰からフォローして態度で示すしかないだろうな・・・」

「どんなに割に合わない事言われても、強い口調で反論しちゃうだめよ」

「・・・努力します」

みどりと僕の意見は良く噛み合う気がする。

噛み合うことで、その道標が正しいか否かを確認する事ができるのだ。

いままでもそうだったけれども、これからもそうであって欲しい。

今日の会議後、FA15名の経歴が記載された資料は、各リーダーに配布した。

ドラフト会議は、明日の朝開催される。

そして午後からは、全員が集合してチーム編成を発表する。

「よし、これで迷わずにすむよ、ありがとう」

「意見が合いすぎて失敗しない？」

笑いながら『赤ちゃんに最高の名前をつける本』に目を配るみどり。

テーブルの上には、同じ2冊の本が重なっている。

伝説

さしずめ気分は、甲高い声で『第1回選択希望選手・・・』ってところだろう。

朝、リーダー2人と顔を合わせた時から、針で咲き刺すような空気が張り詰める。

順番は最初に指名する順番を決めてから、ウエーバー制となる。

1順終えたら、2順目以降は逆に折り返す。

つまり、1順目が3番目の人は、2順目が1番目となる。

営業力という点では、過去の実績をデータとして渡しているのだから、

平均的になるはずだが・・・

「それでは、牧村・川田・田原の順番で指名します・・・」

1回目の順番が決まり、牧原代理がドラフト1位氏名選手を発表する。

「私が指名する人は・・・」

今回召集されたメンバーの中で、有名人が2名いる。

おそらく、牧村・川田両代理もその事実を知っているだろうな。

FAの名簿を見る限り・・・というか、大崎課長のデータを見る限り、

実績では、『各支店のエース級』である事は間違いないのだが、

『各支店のエース』ではないのだ。

それが、何故『エース』になりえなかったのかは、

その有名人2名から推測する事が出来た。

頭取の鶴の一声で決まったプロジェクトチーム。

全員を営業店から人員確保するにあたっては、

現場の意向もある程度受け入れがあったはずだ。

だから、『エース』は出したくないけれども『エース級』であれば、

本社の要請にも応えられるわけで・・・

簡単に言つと、『仕事は出来るけど、集団の中では浮いてしまつ』

というような人達が、厄介払いされてしまった可能性があった。

僕が知っている有名人2名は、そのような意味では、

銀行を代表する『エース』であるのだ。

【空気読めないエース・田口葉月】

【性格キツイエース・矢部園子】

どちらも金字塔を打ち立てる伝説を残している。

例えば田口葉月の場合。

相続の手続きに来店されたお客から、次々大型の契約を取っていく事で名を馳せた。

なかなか不幸があつたばかりの人達にセールスするのは難しい。

けれども相続では大口の財産が動くのだから、セールスのチャンスである事は間違いない。

空気読めない田口葉月は、そんな事はお構いなしのセールスによりついた異名は、

『死神』である。

もちろんお客様が命名したのだが・・・

もう1人の矢部園子の場合。

いつも怒っているという表現がぴったりだ。

もちろん窓口営業中は、『営業スマイル』を持ち合わせている。

3時に銀行のシャッターが下りた瞬間から変貌を遂げる事から、
ついた異名は『大魔神』

鬼の形相となる。

「まだですか？ だいぶ待っているんですけど！」

と顧客からクレームが入った瞬間。

「今やってるところなんだよ！ わかんないの？」

怒鳴り返した事は、伝説となっている。

その他にも細やかな情報は、全員が持ち合わせているようだが、

この2人は突出的にそのような伝説が多い。

「私が指名する人は、松山祥子主任です」

「私が指名する人は、佐藤はるかさん」

「僕が指名する人は・・・」

牧村・川田両代理が指名した人は、どちらも納得いく指名だった。
補佐役として考えるのなら、僕もこの2人を考えていたのだけれども・・・

「僕が指名するのは、1位・田口葉月さん。続いて2位・矢部園子主任……」

いつも冷静な川田代理でさえ、驚きの表情を浮かべている。

順当ならば、最後まで残る可能性が高い2人が指名されたのだ。

「……大丈夫なの？」

牧村代理がたまらず声を掛ける。

「ええ、最初から決めてましたから」

あとは誰が来ようが、この時点で『伝説のチーム』が誕生した。

1号

「無事、チーム編成終わったよ」

頭痛の種は、まだまだ沢山あるのだけれども、

最初の難関を越えた事には、少なからず安堵しているんだ。

ここで揉めるようでは、とてもじゃないけど『仕事』をこなす事は不可能な訳で・・・

「お局リーダーさん達は納得できたの？」

今日もみどりの顔色はさえない。

口にこそ出さないけれども、つわりの症状は軽くはないらしい。

心配して聞いてみても、返ってくる答えは、

「大丈夫」

だから僕はなるべく話をして気を紛らわせる事を心がけた。

女性に対する僕の考えも聞いてもらいたかった事もあり、

このところ、ふたりが会話する時間つてのは、飛躍的に増えている。

川田代理の指名した3人は、いずれも独身のFA。

牧村代理が指名した3人は、いずれも既婚者のF A。

偶然なのか、必然なのか。

それぞれ、どういった思いで指名したのだろうか。

そんな疑問なんかもみどりに尋ねてみる。

僕のチームの3位指名F Aは、最後まで指名がなかった人だ。

残り物には福があつたのか、本当に残るべき人材だったのかは、

時間の経過とともに分かるはずなのだが、

チームのバランスとしては合っているのかもしれない。

「それで、3人目は残っちゃった人なんだけど・・・」

「でも指名の順番は、全員には発表しないんでしょ？」

「そりゃ、順位発表したら大変な事になるよ。代理だけの秘密にしてある」

指名の順番は、期待の現われ・・・と思われるのは当然だ。

まあ、僕の場合は1位でも2位でも3位でも・・・

意図するところは、他の代理とは違っていたはずだから、どちらでも良かったんだけど。

「最後まで残ったのは、宇田川さんって人だけど、『宇宙人』って呼ばれてる……」

「『大魔神』に『死神』に『宇宙人』……すごいチームになっちゃったね」

心配というよりは、好奇心旺盛に聞き入っているみどり。

その目は、僕の意図するところを理解しているようだ。

だから、その核心部分は説明しなくてもいいだろう。

僕のチームの1位2位の人が他のチームに入る事になれば、

チーム運営がスムーズに行われるとは考えにくかった。

それならば、僕のチームに組み入れてしまえば言い訳で……

だからといって、仕事に厳しさを求めないという事じゃない。

同じ女性から厳しく言われるより、

異性から言われたほうがまだマシなのかなっていう、

『感』でしかない。

銀行員のアンテナなんてレベルではないのだ。

正直、宇田川さんが最後まで残るとは想定していなかった。

『宇宙人』とよばれる所以はよくわからないのだが、

過去の実績では、メンバーの中でもトップクラスなのだ。

一緒に働いた人たちの世評も悪くはない。

1位指名されていても不思議ではなかった人材だと思うのだけれども……

「……カリン星かあ」

「えっ、なに？」

「いや、独り言。」

田口さんは結婚しているけど、矢部さん・宇田川さんは独身なんだってさ」

「じゃあ、唯一の混成チームね」

「『チーム独身』『チームママさん』『チーム伝説』なんて呼ばれそっだな……」

ドラフト終了後、午後からの打ち合わせで、チーム構成員を発表した。

表情をゆがめる人は少なくなかったけど、

これも『人事』である以上、従わなくちゃいけないよう外堀を埋めている訳で・・・

チーム毎に1時間、自己紹介程度の顔合わせが今日の精一杯だった。

「リーダーの補佐役は、宇田川さんをお願いしたらさ・・・」

「他のふたりが反発した？」

「いや、満場一致したけど・・・」

「したけど？」

「・・・失神した」

『チーム伝説』の伝説第1号は、すでに誕生している。

講義

1ヶ月に渡る研修が始まった。

投資信託や保険の販売には、専門的な知識が必要となる訳で・・・

銀行員といっても、全ての分野において万能じゃないんだ。

多様化するニーズに対応するには、万能化というより、専門化する
ほうが都合が良く、

それだけ人材を育て上げる事は難しい。

所属するチームは編成したものの、研修期間中は全員が同じプログラムで行動する。

福山市地区以外のFAも集合し、総勢50名での研修では、

チーム編成など忘れてしまう毎日だった。

そんな眠くなる毎日の中、とある研修プログラムにこのような講義
があった。

『先端者FAの体験談講義』

颯爽と研修室に登場する講師は、長沼真央。

・・・郡を敵にした女、黄金の肝臓をもつ女だ。

「FA初心者の皆さまーん、FA6年目の長沼でえーす。どうぞよろしく」

それが敵を増やしている事を、彼女は自覚しているのだろうか？

「やっと終わったって感じ。講師って疲れるわぁ・・・」

講義を終え、長沼女史と行員食堂にて一緒に昼食をとる事になった。

「講義なんていつもお客さん相手にやってるじゃないの」

「お客と行員はぜんぜん違うつて感じ・・・」

人前で話をする事を『仕事』としている人でも、

話しづらい時つてあるものだとな性に納得してみる。

「反応が無いって言うのか、お笑い芸人が鉄板のネタやってさあ、

笑ってくれない会場に出くわしちゃった感じかなあ・・・」

・・・その程度か。

「でも、早いわよねえ。」

田原さんの義理のお父さんとセミナーでお会いしてから3年近く経ってるんでしょ？」

「それを言うなら、セミナーから何年目だとか、僕が結婚して何年目だとかだろう」

「だって、私の『お父さん』にもなる人かもしれないでしょ」

・・・野望はまだ諦めていないのだろうか（汗）

「それは冗談として、私の未来の旦那様と、たいぶ揉めたって聞いたけど・・・」

みどりの兄さんとは、裁判沙汰で酷い目にあっていた。

お互い職務上の職責を重んじたのならば、しょうがない事なのだけれども、

僕達の結婚式への参加も無かったのは、少なからずそれが影響しているのだろう。

この件に関しては、みどりにも報告していないし、みどりも意図して話題にはしない。

「・・・冗談になってないぞ」

いままでのFAがどんな仕事をしていたのか。

長沼代理の話は、詳細を極めて的確であり、

同時に、これからの問題点も浮き彫りとなるものだった。

「つまり、バブルだった訳なのよね。」

売れるときに、売るだけ売ってしまった銀行の贖罪だわ……」

「その敗戦処理が、今回の補充人事って事か……」

冗談交じりのランチであったのに、原点を振り返ってみると、

まったく食欲なんて吹き飛んでしまうんだ。

「みどりさんは元気なの？」

元気が……

体調は悪いようだが、病気ではないのだ。

妊娠しているって事は、どのタイミングで言うものなのか、

それは考えてなかったな。

「ああ、『未来の妹』になるかもしれない『みどり』はおかげさまで変わりなく……」

長沼代理には、ふたりの『みどり』を目撃されている。

奥さんと言われればそんな事は思わないのかもしれないが、

『みどり』さんと言われると、なんとなく躊躇してしまう。

僕の心の弱い部分が疼くのだろうな。

すると、突然長沼代理が顔を近づけ小声で囁くように話しかけてくる。

・ 「すごい、隣の女の人。ラーメンと炒飯とイナリ寿司注文してる・

ひとりで食べるのかしら!？」

心当たりがある人がいるが、まさか・・・

「田原さん、茶碗蒸し嫌いなとき引き受けるけど」

・・・恐るべき胃袋だ。

秘密

「研修中なのに、何故かすごく疲れるんだ・・・」

肉体的な疲れより、精神的な疲れってヤツは、吐き出さないと潰れてしまいそうになる。

そんな言い訳を考えながらも、僕より具合が悪いだろつみどりを前に、愚痴が出る。

ここ何週間かで、妊娠中であるのに、みどりは痩せてしまった様に見えた。

朝食にしたって、夕食にしたって、僕の前でまともにご飯を食べていないのだ。

痩せてないはずは、ないのだろうな。

「夕方、買い物に出かけたらさあ、お隣の田中さんの奥さんとレジで一緒になったのね」

「あの人も、元銀行員だって聞いた事あるな」

「顔見るなり、『あら、おめでた?』って言われたの。そんなに顔に出てるかなあ」

嬉しさが顔に出ていたのか。

体調不良が顔に出ていたのか。

おそらく後者なのだろうけれども、

頑張っているみどりに対して、そんな事を言える訳はない・・・

「ママの顔になってたんじゃないのかい」

僕のエールは、この程度なんだ。

「否定する理由も無いから、教えちゃった。安定期までは秘密にするつもりだったけど」

考えてみると、不思議なものだ。

自分も同じ道をたどって生を受けてたどり着いた事なのだが、

母親のお腹の中に1年近くも一緒にいる訳で・・・

父親となる僕はといえば、このふたりの側で、

どんなことがあっても守り抜くことになるのだ。

かつて『父親になってもいい』と決意した事を思い出さずにはいられなかった。

この大切な過程を母と父と子と、3人で歩んだか否か。

僕が何故あるとき一線を越えられなかったのか。

僕が何故あるとき父親に選んでもらえなかったのか。

何年もたった今になって、本当の答えを理解することができた気がしたんだ。

本当の『父親』になろうとしている今、失敗は許されない。

けれども、僕には『父親』になるには、まだまだ課題が多く残っている。

その一番の課題である『僕の父親』とのわだかまりを解消できない限り、

僕とみどりの『赤ちゃん』と逢える日を、満面の笑みで迎えることが出来ないのだろうな。

「・・・理解しないとな」

「言っちゃいけなかった？」

「ごめん、そういうつもりじゃなくて・・・ひとり言」

またかといった表情のみどり。

男と女の脳の構造上、何かをしながら別なことをするってのは難しいのだと、

何度と無く使いまわす言い訳を繰り返してみる。

ちょっとふくれるみどりの気を紛らせようと、

「で、赤ちゃんの名前の本はよんでみたのかい？」

苦し紛れの質問だ。

「もちろん、何回も読んでるけど・・・」

「最近の赤ちゃんの名前は難しくて、なんて読むのか分からないの多いからなあ」

「もう決めちゃってるの」

・・・僕に決定権はないらしい。

「男の子と女の子。両方の名前は考えてみたんだけど・・・」

一応、目は僕の考えも聞くとして聞いてるらしい。

けれども、僕を支え赤ちゃんを守ってくれているみどりに対して僕が出来る事。

「その案は、赤ちゃんと逢えた日に聞くことにするよ」

秘密の答えは、そう遠くない。

安心

研修もいよいよ最終日を迎えた。

研修を受けただけで、プロのファイナンシャルアドバイザーとして、
営業店やお客様のアフターフォローに行かなくてはいけない訳で・

あとは実践で経験を積み上げていくしかないのだ。

各個人にかなりのレベルの差があることが判明した研修期間。

チーム制によって、チーフが各F Aをフォローする方法は間違っ
てはいなかった。

ただし、僕がさらに全チームを取りまとめるには、

時間的にも量的にも不可能と思われたのだが・・・

「・・・まあ、もてあます様なら増員考えるから」

本社の人間の考えなど、所詮この程度なのだろう。

研修中、講師でやってきた人事部長から軽くあしらわれてしまう私。

まさしく『ひとごと部長』だ。

「そろそろ出かけませんか？」

最終日のこの日は、研修終了後、慰労と懇親、そして決起大会を兼ねた

『あんしん銀行FAの集い』が開催される。

「そうしますか・・・」

そう答えながらも、「誰だっけ？このひと・・・」

いまだに顔と名前は一致しない。

「牧村チームの森野です」

「ごめん、まだ全員の顔と名前が一致して無くてさ・・・」

その事を表情に出さなかった自信はあった。

しかしながら、このひとが僕の感情を読み取ったのは、

単純に『女の感』なんてものじゃない気がする。

彼女も銀行員のアンテナをもっているのかもしれないな。

「FAの活躍を祈念して乾杯」

銀行の女性は酒豪が多い。

長沼女史もそうだけでも、ここにいる面々も負けず劣らず強そうな顔をしている。

懇親の目的からすれば、お酌したりされながら席入り乱れるところであるが、

総勢50名のF Aに本社の面々を合わせて80名からなる宴会である。

全員に挨拶することなど不可能なんだ。

「田原さんはお酒を飲まれないってホントですか？」

僕の隣は、偶然にもさきほどの森野さんだった。

「・・・アルコールは一切ダメなんです」

乾杯用のビールにもほとんど口をつけていない森野さん。

彼女もお酒はダメらしい。

そんなささやかな情報だつて、これから14人分を毎日蓄積していかなくちゃならない。

まだまだ僕が行き着くその先は、遠いところにあるのだと、

そして僕は途方にくれるのだ。

「ビールは苦いので嫌いなんです。もっと濃いのが無いですかね」

・・・さらに途方にくれそうな情報へと書き換わる。

「森野さんはご結婚してるんですね」

牧村チームは全員が既婚者だったはず。

会話を噛合わせるべき情報はそれくらいしか持ち合わせてはいないのだ。

「9歳の子供がいますよ、2人も」

「2人って双子ですか？」

僕も双子で生を受けてきた。

とはいえ、男と女の組み合わせだから、世間で言う双子とは、違うものだと思っている。

「田原さんのところは『おめでた』だって聞こえてきましたけど」

「・・・早いですね。寮の隣の奥さんにしか話していないって聞いてたけどなあ」

「女性陣の情報網は凄いですから」

凄いとは知っていたけど、インフルエンザ並みの感染力だ。まったく・・・

「安定期に入っていないんで、あまり話す事じゃないと思って・・・

」

「大丈夫です。林さんと私は同じ支店で働いてたから、友達だから他のF Aの皆さんには話してませんから、安心してください」

先を見通すかのように話しかける森野さんは、

銀行員のアンテナをもっているのに間違いない。

何気ない会話の中にも、相手の心を優しく包む暖かさがあるのだ。

「この人ならば、F Aとしてやっていけそうだな・・・」

まず1人目の「安心」を手に入れたと確信する。

「・・・すいません、水割りじゃなくてストレートダブルで。ノーチエイサーで！」

さつきから、ウイスキーのおかわりは何杯目だろうか？

・・・不安も手に入れた。

記録

研修を終えた週末、本来であればゆっくり心と体を休めたいところであるが、

土曜日も日曜日も僕と三人の代理は出勤となった。

来週からスタートするF Aの活動スケジュールの最終確認作業と、同じくして新規開設となる相談窓口の打ち合わせがあった為だ。

金曜の夜から始まった梅ノ木支店レイアウト変更工事。

絵に描いたような突貫工事なのだが、平日に銀行の改装工事など出来る訳もなく、

請負業者さんの悲鳴が聞こえてくるような、激烈な工事となるのだ。

相談窓口の正式名称は事前に知らされることは無かったが、

『あんしん銀行相談プラザ』

真新しい看板を設置している時にそれを知りえたのだが・・・

「・・・ベタな名前だわ」

川田代理のつぶやきは、その場にいた全員が共感したことだろう。

「牧村代理、今日はなんか元氣無いみたいですね・・・」

いつもうるさいくらい喋り続ける人にしては、口数は極端に少ない。

まあ、喋らないときは具合が悪いときか、機嫌が悪いときくらいしか無い。

そう断言できるほどの人なのだ。

僕じゃなくても、その異変には気がつくことは出来る。

「昨夜の懇親会の後、3次会までいっちゃって・・・」

「ごめんなさいね。仕事はちゃんとやろうとしてるんだけど」

良く食べる事では右に出る人はいなくても、お酒はさほど強くは無いのだろうか。

二日酔い状態であるらしく、テンションはなかなかあがらない。

休日出勤であることが、さらに酔いが醒めない原因かもしれない。

「・・・実は私も二日酔いで」

川田代理が珍しく仕事以外の話をした。

なんでも2次会に参加したところ、意気投合した人が相当の酒豪だったようだ。

「なんか途中で意地の張り合いになっちゃって・・・今考えると馬

鹿みたい」

知り合ったばかりなのだから、お互いに知らないことだらけな訳で・

時間と共にいろいろな事を知りえるわけだけでも、

彼女達は何を考え、何をとうしたいのか。

それを理解し続ける事。

銀行員であつても、そうでなくても、人と人との交わりは、

選択権の無い場合が多いのだけれども、縁あつてひとつの仕事をする事になったのだ。

またそれが始まったのだと、ふたりのそんな瞬間をみながらこう思った。

「愛するとは相手を知ること。愛の別名は理解である。

・・・今度はチーム愛かな？」

時刻もお昼近くとなり、スケジュール等の事務的な確認は一通りの目処がついた。

「お昼ごはんどうしますか？」

二日酔いのふたりを気遣いながら聞いてみる。

流石の牧村代理も重いものは食べたくないらしい。

梅ノ木支店の近くに、最近出来た蕎麦屋があるとの情報を聞いた一同は、

「蕎麦くらいなら・・・」

ちよつと早めの昼休みをとる事にした。

「いらつしゃいませえ、3名さまご来店です」

挨拶は仕事の基本だ。

新しいお店の『やる気』は、挨拶にすべて表れる気がする。

「蕎麦処さくら」

和風モダン的な店構えは、まさし蕎麦屋である。

普段は行列も出来ることもあるらしいが、ちよつと早めの昼食の為、スムーズに席に着く事が出来た。

「あれ、メニュー無いな・・・」

壁やテーブルのどこにも、お品書きらしきものは無かった。

お茶を持ってきてくれた元気の良いお姉さんにメニューを頼んでみるのだけでも、

「申し訳ありません御客様、当店はざる蕎麦食べ放題のお店なんですよ」

二日酔いに『食べ放題』は無いだろうと、店を代えるか否かふたりに聞いてみるのだが・・・

牧村代理はともかく川田代理も、戦闘態勢の輝きが瞳の奥から溢れている。

「・・・二日酔いじゃなかったっけ？」

・・・まだ食うのか。

さっき注文した10杯目の蕎麦が運ばれてくる。

「頑張ってください。うちのレコードは12杯ですから」

しかしながら、目からは激励など感じられない。

当然なのだが。

「おかわりは、田原代理が注文するのよ。乙女心に痛いから」

どこにあるのかわからない『乙女心』の為に、さっきから店員さんの視線がやけに痛い。

来店当初の営業スマイルはどこにいつてしまったのだろうか。

そして、二日酔い無かったはずの食欲は、どこから湧いて出てきたのだろうか。

ちなみに10杯目を頼んだのは、牧村代理だけじゃなかったんだ。

川田代理もほぼ同じペースで食べ続けている。

昨夜に引き続き、意地の張り合いか。

それとも良く食べる人2号さんなのか。

僕は3杯目でギブアップしているのだけでも・・・

「新記録って事は、その前でやめろっていう意味で言われたと思う？」

11杯目を食べ終えた牧村代理。

川田代理は10杯目で打ち止めらしい。

「はい」

心ではそう思っているのだが、

「気にすること無いですよ・・・」

気にしてあげた。

「で、昨夜おふたりがお酒で負けた人ってだれです？」

「講師を務めてくれた長沼さんよ」

「・・・やっぱり」

相変わらず酒は強いな、彼女は。

たしかビールは酒じゃないって言ってたもんな。

自称、『頬を染める魔法の雫』だ。

しかしながら、このふたりも負けていない。

この食べた蕎麦の空になったセイロ見せ付けてやれ。

結局、11杯目で心残りながらも打ち止めとした牧村代理。

清算をすませるとレジのところに12杯食べた記録ホルダーの名前と写真があつた。

「新記録達成・12杯 長沼真央様」

・・・想像を絶する怪物だ。

パパ

改装工事の傍ら、飾りつけの作業には、窓口担当となった3人のママさん達が合流した。

窓口専門としたのには、3歳未満の子供がいるとしたのが理由だった。

彼女達の知識とか経験が不足しているどころか、

独身時代はいずれもが名を上げた女性行員達なんだ。

しかしながら小さい子供がいると、どうしても早く帰らなくては行けなかったり、

休みがちになったりする。

窓口専門の担当であれば、残業させるつもりもないし、家庭優先となっても、

3人で補完してくれるのならば、ある一定期間は人員が多いと批判を受けても、

『テスト期間』と目こぼしされる可能性が強いわけで・・・

そんな思いが伝わったのか、自主的な申し出というのは嬉しかった。

しかし・・・

「田原さん、ちょっとの間子供お願いできますか？」

ママさんの1人、鈴木さんは1歳8ヶ月になる子供を連れて来ていた。

店舗のディスプレイは僕の出番は無いようで、一番役に立っていない事は間違いない。

「・・・子供面倒見たこと無いですけど大丈夫ですかね」

最初のみどりの子供も、こんな時期があったなと、

思い出しては悲しいというか、切ないというか・・・

寝顔でしか逢った記憶の無いみどりの子供。

その子供はもうこの世には存在しない。

僕には新しい命を授かろうとしているし、鈴木さんの子供も、

そんな事とはまったく関係なく元気にはしゃぎまわっている。

ふと気がついたもうひとつの理由。

僕が赤ちゃんを半分喜べなかった理由。

あの子を思うならば、喜んでいいのか・・・

そうじゃないのか・・・

答えは、まだ見つかっていない。

「男の子だから、すばしっこくて。後ろから追いかけてくださるだけでいいんです」

多少は転んでも泣くだけだとは言われるのだが、

預かるほうとしては、転んで怪我される事を考えればそついうわけにはいかない。

「店舗の中だとするさくて迷惑掛けちゃいますから、となりの公園にでも・・・」

「・・・わかりました。公園に行ってきます」

こうして僕の公園デビューが決定した。

・・・何ヶ月までが『赤ちゃん』で何ヶ月から『子供』なんだろう。

右に左に、ちよろちよろ歩く鈴木さんの子供を追いかけているが、

その子が『子供』なのか『赤ちゃん』なのか考えてみた。

言葉はまだ喋れないみたいだ。

こちらの呼びかけには反応するようだが、向こうからの言葉にならない

「あーあー、うーうー・・・」

を僕は理解することは出来ない。

「あら、かわいいお子さんですねえ。何ヶ月ですか？」

すれ違うおばさんから声を掛けられる。

「1歳8ヶ月です・・・」

・・・って聞きましたと言つのが正解だろうが、その説明をするには、

いろいろ話をするが多すぎる。

「パパと一緒によかったねえ」

子供の頭をやさしく撫でると、軽く会釈して立ち去っていくおばさん。

傍目で見える僕とこの子は、普通の親子に見えるのだろうか。

「・・・1歳8ヶ月かあ、僕の1年8ヶ月前は東京に行った時だな」

この子と僕は、ともに劇的な変化を向かえた同じ時間を過ごして来た訳で・・・

その時間は、かなり短いものだと感じていたけど、

3000グラム程で生まれてきた赤ちゃんが、

1人で立ち上がり、意思を持って歩き回っている。

そう考えれば、すごく長い時間だったのかと思い返されるのだ。

これから出遭う僕とみどりの赤ちゃんも、一緒に街を歩いたり、

公園に行ったならば、誰もが僕とみどりの子供だってわかってくれる事だろう。

「かわいい子供」

と言われれば、僕だってまんざらな気持ちではなかった。

他人の子供でさえ、いとおしくなるのだ。

これが自分とみどりの子供ならば、どのくらいの喜びとなるのだろうか。

そう考えながら、走る子供の背中を見つめていると、

ふと子供が立ち止まり動かなくなった。

「あれ、どうしたの？」

まっかな顔をしながら、なにか力を入れている。

・・・まさか。

「ちっ、ちっ」

・・・鈴木さん、オムツ取り替えてください。

子供を抱えて走り出す。

女性

「順調な滑り出しじゃないか」

相談プラザへの来店客数は、当初予定した数字を遥かに上回るものだった。

来店感謝イベントの告知は、FAとは別の推進部スタッフが専任してくれた為、

僕達は勞せずして研修に集中することが出来た。

しかしながら、新規開店する店舗やこういった特別窓口は、最初は必ず人は来るのだ。

田舎芝居を見物に来る感覚とでもいうのか、好奇心は人を動かす力がある。

滑り出したのか、転がり出したのか。

今の段階では、来店客数の結果だけでは判断することは出来ない。

「預金の獲得は順調ですが、リスク商品はまったくですので・・・」

「認知されれば、収益は後からついてくるさ」

『収益』という名の『魔法』

うちの銀行だけじゃなく、ほぼすべての銀行が、『収益』という短

い言葉に支配されている。

「・・・頑張ります」

僕もその言葉の魔力に捕らえられた一人なのか。

その答えも、まだ出てはいない。

「今後のスケジュールはどうなってるの？」

「はい、明日からは班行動にうつります。まずは挨拶と、各支店とのFAの『役割』を

打合せしたいと考えています。各支店ごとの事情もことなると思いますので、柔軟に対応する

つもりですが・・・機能するまで正直どのくらいの時間がかかるかわかりません」

「実績をすぐに出すことなど考えていないが、女性の組織となってしまう訳だから、

そちらの方をよろしく頼むよ・・・」

『女性の組織になってしまった』

その言葉は、銀行のFAに対する方針が、現在進行形で揺らいでいることを証明だ。

もちろん、組織として機能する難しさの事も心配しているのだろうが、

僕達の結果次第では、男性行員が大量に注入される事も含み置きさ
れているのだろう。

銀行員のアンテナも、そう受信している。

「ところで、これから各支店担当のF Aは顧客訪問もするんだろ？」

「はい、基本的にアフターフォローは、来店を待つより訪問したい
と考えています」

「女性一人での行動は大丈夫なのか？」

性的な嫌がらせとか、枕営業への不安はだれもが考える事だろう。

不安を上げれば切が無いが、そういつたりリスクを想定することは大
切なことだ。

女性行員が単独で顧客訪問する事は、研修でも生保大手各社からレ
クチャーは受けていた。

生保レディが長年そういった環境で顧客訪問をしているのだ。

銀行員だからといってできない訳じゃないのだけれども・・・

「当面は、支店の得意先担当者との帯同訪問中心で考えてます・・・

」

「ああ、そうか。特にセクハラ関係はいろいろ難しいから慎重にやってくれ」

「顧客がそのような要求した場合の報告も徹底させます・・・」

嘘か誠か、僕には分からないけど、

金融業界・・・特に生命保険では『枕営業』なる言葉が存在する。

女を武器にする。

つまり、性的な思わせぶりを獲得の手段とする営業活動だ。

夜の世界じゃないのだから、そんな営業手段が許されるわけが無い。

もちろん、その反対も考えられる訳で・・・

大口契約をちらつかせるなど、優越的な立場を利用して顧客から性的な要求をしてくる事。

結果として『女』を使った時点で、『枕営業』と呼ばれてしまう。

こんな事が、僕達FAが行ったとすれば、FA自身は当然ながら、

組織全員が不幸な結果を受けることは間違いない。

「女性であることを忘れてください。そして、女性であることを忘れないでください」

第一回の全体ミーティングでの僕の第一声は、当たり前前に聞こえるのならば、

なんとも矛盾してしまう、この事から始まった。

「全員に注意を促していますから大丈夫です・・・」

「期待しているから、頑張ってくれ」

その期待を大きく裏切る事件が起こるのは、間もなくである事を、

この時、僕は予想することが出来なかった。

伴侶

担当支店への挨拶回りは順調に進んでいた。

アフターフォローという仕事は、手間も専門的な知識も必要だ。

そして一番消費してしまうものが『時間』である。

忙しい窓口業務で、量を裁く事を求められる中、

販売実績とは関係の無いアフターフォローを専門でしてくれるFAは、

支店にとってもありがたいらしい。

「順調みたいでよかったね」

このところの僕の表情を読み取ってなのか、最近詳しく説明してなかった仕事の進捗状況を、

みどりは、いとも簡単に当ててしまう。

「そうだね、本格的な始動はしていないけど、順調にいつてる感じだ」

このところのみどりは、一時期のようなひどいつわりも山を超えた様子である。

もっとも、ひどかった時も、『つらい』と言わなかったのだから、

それも僕の予想に過ぎない。

お互いに詳しく言わなくても以心伝心できる事は、

夫婦の階段を、またひとつ昇っていくような感じがして嬉しく思える。

「研修中でも、女性陣の事は大分慣れて来たんじゃないの？」

「慣れ・・・ねえ。ちょっとづつ理解しようとしている感じだなあ。

実際、分かって来たのは牧村代理は異常なくらい良く食べる事。

川田さんも負けずに良く食べる・・・けど、負けず嫌いなんだろうな

それから森野さんは酒が異常に強くて・・・」

「それだけ知ってるんだったら、慣れちゃってる証拠だと思うな」

「・・・なるほど」

「ちょっと羨ましいかな・・・」

結婚してから、みどりが僕の生活の一部となっていた訳で・・・

だからといって粗末に扱っていたとは思っていなかった。

妊娠している事が理由ではなく、今までも、これからも。

大切な存在であることに变りは無い。

でも、彼女にしてみたら、本当に大切にされていると感じていたのだろうか？

羨ましいと感じる思いには、どのくらいの深さがあるのだろうか。

「私もそのお蕎麦屋さん行ってみたいなあ」

「調子がいいんだったら、いつでも連れて行ってあげるさ」

何故、人間は伴侶を得ようとするのか。

二人で人生を歩む事によって、悲しみは半分になり、喜びは倍になる。

だから、伴侶を得る事はありがたいことであり、

誰を伴侶に選ぶという事は、とても大切な事・・・

「一人居て喜ぶは、二人と思うべし」

かつて僕が迷っているとき教えてもらったこの言葉が、自然に頭の中を駆け巡る。

幸せな毎日が続くと、ついその幸せが退屈になってしまっていないか
っただろうか。

家庭と仕事の両立。

だれもが当たり前に行っているようなことなのだけでも、簡単そうにやっではいけないのだろうな。

忘れないようにと自分自身に繰り返す。

「はい、田原です」

そんなことを考えている間に、電話が鳴った。

時間は午後10時をまわっている。

この時間からの電話はろくなことが無い。

夜中に掛かってくる電話の多くは、大抵よろしくない場合が多いからだ。

僕の携帯電話にコールが無いのが銀行関係ではないとの安心でもあるのだけれども・・・

「聡さん、警察からなんだけれども・・・」

「警察・・・俺に用事って？」

「よくわからないけど、あんしん銀行の田原さん宅でしょうか・・・」

自分が悪いことをしていなくても、警察というだけで不安を覚えるのだが、

『あんしん銀行』の名前が出た以上は仕事上の用件があるのだろう。

「はい、わかりました田原聡です・・・」

物語が動き出した。

降臨

「本当にご迷惑をおかけいたしましたして、申し訳ございませんでした」
深々と頭を下げながら、真夜中の闇に静まり返った警察署を後にした。

駐車場にとめた車の助手席に乘るように促そうと彼女の方を振り向くと、

警察署の入り口にある重々しい階段の途中で、うつむきながら動かなくなっている。

「さあ、帰ろう。宇田川さん」

「・・・帰れません」

「・・・は？」

「・・・帰れないんです」

「『ご両親だって心配しているから、帰らないでどつするの』」

「・・・だって、門限は9時なんです」

「・・・宇宙人、降臨。」

「・・・ということで、連れて来ました」

真夜中のあんしん寮では、みどりが心配して起きていた。

警察からの呼び出しというのは、宇田川主任が信号で停車していた大型トラックに、

追突事故を起こしたとの事であった。

不幸中の幸いにして、運転手さんも全くの無傷である事と、

トラックの車両にも目立った傷はなかった。

しかしながら、後ろからの追突は、宇田川さんが100%の過失となる。

『業務中の事故』との事で、直属の上司である僕に連絡があった訳で・・・

事故が起こったのは、午後8時45分。

その事を警察から聞いたとき、何故その時間まで仕事をしていたのか不思議に思った。

確かに彼女担当の支店へは、挨拶回りを終え、先週からその支店に毎日出勤させていた。

僕のチームでは、もっとも大きな支店であり、その分仕事のロットも大きくなるが、

最初から残業させるような仕事は求めないでくれと、支店長宛念を押したばかりなのだ。

業務中、事故を起こした場合は、速やかに上席に連絡しなくてはいいけない。

その後、さらに所属している長。そして本社担当部署まで報告を要する。

たとえそれが真夜中であっても、それは実行しなくてはいけないのだが……

「核心部分はさっぱり話してくれなくってさ……

事故で気が動転しているせいだろうけど、彼女の住所も知らなくって」

「なにか飲み物でも用意するわ……」

「あれにしてくれ、『兄貴』からのヤツ」

程なくして、紅茶とチョコレートがテーブルに並ぶ。

「さあ、これ飲みながら聞いて頂戴。一見紅茶とチョコレートに見えるこれって、

実は『投資信託』なんだけど、何故でしょう」

「……『投資信託』ですか？」

僕が『兄貴』と慕う銀行の先輩、大木さん。（・・・おい、殺されるぞ）

現在は、本社事務部の調査役だ。

彼女はある時期に、決まって特定の人達に向け、強制的に『投資信託』を送りつけてくる。

そう、『バレンタインデー』だ。

今年は、紅茶と某有名店のチョコレートが『実弾』だった。

みどりは妊娠してから、甘いものは控えているし、実際つわりで食べられなかった。

冷蔵庫にオブジェとなってから久しかったのだが、ここは兄貴の力を借りるでしょう。

「ああ、元本（初期投資）の3倍保証型の投資信託だよ。

1ヵ月後に償還を迎えるから、年利にすると36%だな。グレーゾーン甚だしい・・・」

「それって、バレンタインデーのチョコってことなんですか」

「おっ、察しがいいね」

やっと笑いが出てきたところで、『兄貴』について説明してみせる。

親しくしている同僚にチョコレート送ってくるけど、

ホワイトデー近づくと、やけに連絡が来るようになる事。

もし忘れようもするなら、厳しい『督促』が待っている事。

でも、こんなことを出来るってのは、信頼の証なんだという事を話してみた。

「いい先輩ですね・・・」

「ああ、厳しい『督促』される時には『金融暴力団』・・・なんて思えるんだけどね」

「今年は何をお返ししたんですか」

やっと瞳に輝きがでてきたようだ。

『兄貴』をダシにしてしまった事には、多少罪悪感を・・・

いや、それは無かった。

有効利用出来たことに、チョコレート達も浮ばれる事だろう（失礼）

しかしながら、これでスタート地点なのだ。

業務中であつたと聞いたが、彼女の服装は確かに銀行の制服だ。

出社や退社時には、私服と規定されているのだから、遅い時間への疑問もある。

そして、門限が9時。

取引先、お嬢様の採用が多い銀行の採用人事。

みどりの様に、会社経営者には厳格な家訓をもつ家も多い訳で・・・

彼女もそういった事情があるのかもしれない。

いづれにしても、まだまだ先は長そうだ。

「今年のお返しは、テディベアのぬいぐるみだったけど・・・」

今までの話を聞く限り、随分ベタな贈り物だなんて顔をしている。

去年が新巻鮭で、その前が木彫りの熊。鮭くわえているヤツだ。

とてもホワイトデーの贈り物だとは思えないだろうが、

その『意外性』が兄貴にもツボらしい。

木彫りの熊から、一連の流れでは間違っていないはずだ（あやしい）

「うちの奥さんと出かけたとき、テディベアミュージアムって所で、

発送させたんだけどさ・・・」

『ハッピーちゃん』という名のテディベア。

どこか海外の、有名なデイベアのレプリカらしい。

「金額のケタ間違えてさあ・・・」

「おいくらだったんですか」

「・・・8万円」

・・・予算、10年分。

門限

「8万円のクマのぬいぐるみって初めて聞きました」

「そりゃ、僕だって同じさ。8千円でも高いと思うもの。」

いくらホワイトデーにしても、過剰サービスすぎだよね」

紅茶の温かさからなのか、兄貴のバレンタイン話のお陰なのか・・・

顔色も徐々にはあるが戻りつつある様子だ。

車の事故を起こしたのは初めてなのだろうから、動揺したのは当然なのかもしれない。

得意先係り担当者から、大口顧客への帯同訪問を依頼され為、

帰宅時間が遅くなったのだと、事故の経緯がようやく明らかになってきた。

夜間の顧客訪問は、女性FA単独で行うことを禁止している。

営業担当者のアシスタントという事であれば、問題が無いのだけれども、

最初、慣れるまでは遠慮してほしいと、依頼しておいたはずだった。

「・・・遠まわしすぎたかな」

F Aの立場と支店の立場では、それぞれの考え方が、
噛み合わない事が多いのかもしれない。

「どうしても断れなかった」

彼女の口からは、僕の指示と支店の指示の板ばさみになった苦悩も
読み取ることが出来た。

「よし、わかったよ。今回の件は僕の胸にしまっておくから、

心配しないで明日からまた頑張つてよ」

「・・・ありがとうございます」

「ただし、宇田川さんも承知しているだろうけど、事故を起こした
場合の規定。」

忘れてないよね。その事を良く考えて注意してくれ」

さすがにこれは堪えたのか、うつむいたまま涙を超ええ切れない。

言いたくないけど、リスクはお互いに踏む訳で・・・

最終的には、彼女の為なのだ。

と、自分自身に納得させる。

「・・・はい、わかりました」

「どう分かった？」

「事故は起こってしまいましたが、実は起こっていない事になったやっただのと、

田原代理から警察屋さんまで迎えに来てもらった事や、

田原代理のお家まで押しかけてきちゃって、熱い思いの詰まった紅茶と、

とろけるようなチョコレートご馳走になった事は秘密にします・・・」

・・・すまんが、カリン星の言語はやめてくれ。

時刻は真夜中をとくに過ぎている。

門限のことはよく聞かなかったけれども、とにかく今日は自宅に帰ってもらおう。

あのままだまりこまれたら、僕の手にはおえなかったし、

みどりの協力も必要になったはずだ。

自宅を聞いたら、車で5分ほどのところだった。

相手にはほとんど傷がなかった事故ではあったが、彼女が乗っていた軽自動車は、

見た目にも大きくは損しており、修理しない限り乗ることは出来なかった。

門限はともかくとして、自宅にかえしても、その事を隠しとおせることではないし、

説明をすべて彼女に任せてしまつて良いものかと考えてしまつ。

「門限があるのは本当なんです」

僕の車にのりこむと、彼女はその事を話し始めた。

彼女も失礼ながら30歳を超えているのだ。

今時門限なんてある家は、なにかしら世間とは違う事情があるはずだ。

「遅い時間だけれども、僕でよかつたら一緒に謝るし、説明もするけど・・・」

口元に微かな笑みを浮かべながら、なにやら悲しげにもみえる瞳で答える。

「でも、FAに指名されてから、遅い時間まで仕事になる部署だつて聞いたので、

父から門限は撤廃してもらつたんです」

「でも、いくらなんでも遅すぎないかい？」

「お酒の席も増えるからって、いちいち連絡しないっていつてますから大丈夫です。」

それに、私が帰ったかどうか分からないですから・・・」

彼女に言われるまま運転をしていると、ひととき長い生垣に囲まれた通りにさしかかる。

「あつ、ここでお願いします」

・・・すごいお屋敷だ。

やはり、銀行員の女性はお嬢様が多いのだろうか。

屋敷を見る限りは、うちの銀行でもトップクラスの取引先に匹敵するだろう。

みどりの家より大きいかもしれない。

「それじゃ、ありがとうございます」

あっけにとられる僕をよそに、セキュリティのカードキーで開錠し、

屋敷の中に消えていく彼女。

これだけ大きな屋敷ならば、いつ誰が帰ったかなんてわからなくて当然かもしれない。

「・・・でもなあ、なんか気になるなあ」

腑に落ちないこの思いは、アンテナが作動しているからか、

カリン星人とのファーストコンタクトが衝撃的だったからなのか。

このときは理解することができなかった。

そして、その理解できなかった不甲斐ない事実とは、

僕が犯した最大のミスとなった。

狭間

警察沙汰となった日から数日間は、何事も無いことが不思議なくらい穏やかな日が続いた。

もちろん、被害を受けた先方への謝罪であるとか、警察への挨拶であるとか・・・

秘密裏にすべきことは少なからずあったのだが、

宇田川さんの精神的な後遺症なんかを心配していたのだ。

銀行に来れなくなったり、車を運転できなくなったり・・・

事故の後遺症は、肉体的なもの精神的なもの、そして金銭的なものと、

目に見えない部分でも、傷を負っている可能性があるかもしれない。

「昨夜は、田原代理と日付を超えながら暖かい紅茶と一緒に飲んだの。」

ゆづかの事をとっても心配してくれたのね」

・・・などと、銀行で話してくれてたら、僕も相当なダメージを負う。

「今のは、カリン星の言葉で『おはよう』って意味です」

・・・言い訳にならない『言い訳』を妄想をしてしまった。

まあ、それは冗談として（ほんとうか？）彼女のことは、

しばらくの間注意しておかなくてはいけない。

それとなく様子を伺う為、彼女の担当支店へ出向いてみるが、

特別変った状況にはないようだ。

宇田川主任の場合だけではなく、僕達の福山地区FAチームは、FAに何か変った事や、

緊急連絡がある場合、携帯電話のメールによる連絡方法を採用している。

顧客との折衝が多いFAの仕事では、内容を言葉で聞くより、

文章で受け取るほうが都合がよい訳で・・・

相談プラザ開設後は、数分おきに受け取っていたメールの件数が、

この数日間、ほとんど無かったのだ。

たった数日で、FAのスキルが向上したからだとは思えないが、

メールが来ないということは、『事件』が少ないと解釈していいだろう。

「便りが無いのは、無事の知らせか・・・」

警察沙汰となったのだから、みどりにも心配させてしまったが、

宇田川主任を送り届けた後のみどりの反応は、僕の予想と違っていた。

「カリン星人って意味がわかったわ」

・・・大爆笑。

実際僕の話の中だけの存在が、事情はどうあれ、目の前にやってきたのだ。

今まで聞いていたカリン星人の伝説が思い返して笑いが出たのか、

帰り際の確認したカリン星の言葉が面白かったのか・・・

「でも、すごくかわいい人だったわね。可愛そうだから優しくしてあげて。

でも浮気しちゃダメよ」

・・・まあ、最高の褒め言葉だと解釈しよう。

今やってる、僕の一日の仕事の流れはこうだ。

朝は8時ちょっと前に、相談プラザに出社する。

8時半から9時まで、リーダー3人と打合せだ。

週に2回、この打合せに本社の大崎課長が加わるが、水曜日の朝だけは僕が本社に出向いて、活動報告と推進策を説明するのだ。

打合せが终れば、リーダー達は各チームのFA達が担当する支店に移動する。

相談プラザ専任のFA以外は、担当する支店に直接出社し、

業務が终れば、直接帰宅する。

毎日相談プラザに帰店するのは、各リーダー達であり、それぞれのFAから送られてくる、

活動報告を取りまとめ、福山地区の現状を把握する。

ようやく形となったのは、ここ数日の事だ。

手探り状態の船出なのだから、この先どういった形になるのか・・・

「・・・なるようになれだ」

そう繰り返し、呟いてみる。

すると、静まり返り久しかった僕の携帯電話が、騒がしく鳴り始める。

「・・・おっ、メールか。」

・・・あれ、またメール。

・・・おいおい、またメールかよ」

発信者はすべてF Aからだった。

相談プラザの窓口担当F A 3名と、川田チームの佐藤はるかさんからのメールが、

時を同じくして送信されてきた。

「・・・なんか嫌な予感が」

真夜中の電話が鳴ると、ろくな事がない。

それと同じなのだ。

【連絡：矢部園子が暴れています。至急戻ってください！】

4通全てこんな意味合いだった。

「・・・大魔神！」

次は何をやってくれたと言うのだ。

・・・なるようになれとはメールの着信音ではない。

苦情

「いったい何があった」

静まり返った、梅ノ木支店内にある『相談プラザ』

メールを送信してくれた4人が顔を見合わせる。

「大・・・じゃなかった、矢部さんはどこにいるの？」

「それが、奥の更衣室に閉じ困ったまま、出てこなくなっちゃいました」

そう答えたのは。佐藤はるかだった。

「状況をはじめから教えてくれ。

僕が分かっているのは、大暴れした事と、更衣室に閉じこまった事だけだよ」

同じフロアには、梅ノ木支店があり、ここで僕達がトラブルの話をしているならば、

相談プラザへのお客様だけではなく、支店のお客様にも、

普段とは違う空気を感じ取らせてしまうだろう。

「じゃ、佐藤さん代表して応接室で説明してくれるかい。時間は大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「鈴木さん達は、矢部さんが更衣室から出てきたら、

バックオフィスで待機するように伝えて。頼んだよ・・・」

気性の激しさは聞いていたが、その爆発を目の当たりにするのはこれが初めてだ。

おそらく、佐藤さん達もそうであるに違いないだろう。

僕がうるたえる訳にはいかないが、相手は女性なのだ。

対処できるかどうか、佐藤さんの説明は大切な情報となる。

「・・・なるほど、どこからきたか分からないけど、電話してる途中で怒り出したんだね」

「はい、私は相談プラザに担当支店のお客さんが来店のお約束があつて、

その資料作りの為に、バックオフィスで仕事していたんです。

矢部さんは、今日は朝からずっと相談プラザにいたんですけど、

なんかカリカリしてるようで、話しかける雰囲気じゃなかったです」

今日は、全員集合しての打合せは予定されていない。

佐藤さんのように、お客さんとのアポイントがなければ、

直接担当する支店に出社するスケジュールになっているはずだ。

それが、朝からずっと相談プラザのバックオフィスにいるということとは、

『支店に行けない理由』があつたのかもしれない。

どのくらい暴れたかは聞かなくても分かるくらい、バックオフィスの机の上は、

資料・パンフレット・筆記用具が散乱していた。

間違いなく『大魔神』が暴れていった痕跡だな・・・

「梅ノ木支店の人達には迷惑かけてないか？」

「暴れたのがバックオフィスだったので、支店の人達はなんかあったの？」

程度振り返っただけで、お客様へはご迷惑かけていないと思います」

矢部さんが起こした『暴動』にも驚いたが、佐藤さんの僕への『報告』が、

要領を得た答えというか、痒いところに手が届くというか・・・

非常に的確であり、僕の知りたい事と、その先に求める答えを説明

してくれる。

そのことも、驚きのひとつであった。

福山地区のFAが、全員集まった日、隣に座って依頼、

チームが別になった事もあり、彼女とはほとんど会話する機会が無かった。

川田代理がドラフト1位指名する理由がよく分かる。

「・・・やっぱリドライチだな」

それに引き換え、矢部さんは僕のチームの同格1位だ。

自分の選択なのだから、誰も恨みようが無いが、

来るべきして来てしまった事件なのかもしれない。

まあ、川田チームや牧村チームでのトラブルじゃないことが、

せめてもの幸運と考えることにしよう。

「田原代理、お客さんが来ちゃったみたいなので、失礼していいでしょうか？」

「もちろん。いろいろありがとう。とても分かりやすい説明だったよ」

はにかむように笑顔がやつと表情に浮ぶ。

FAでは最年少だって事だけでも、お客さんへの折衝能力は抜群のセンスを感じる。

「・・・あーゆーの、ウチにいたらなあ」

死神に宇宙人に大魔神。

・・・チームの濃さでは負けていないが。

「支店です」

銀行の内線電話で、彼女が担当する支店に、何らかの情報が無いのが確認してみる。

「推進部FAの田原ですが・・・」

「あつ、今連絡しようとしてたんですけど・・・」

やっぱりといった反応がある。

『行けない理由』が存在した可能性が高くなった訳で・・・

「今、得意先の課長と代わります」

「はい、申し訳ありません」

事情を聞かない内に、つい謝罪の言葉が口に出る。

「ああ、田原代理？得意先の木田です。矢部さんの件聞いたかい？」

「先ほど相談プラザで、電話対応が酷かったと報告があつて、今戻つた所です。」

申し訳ありませんが、内容についてはまったく把握できておりません・・・」

「昨日報告しなかったのは私も迂闊だったかな・・・」

実は、昨日お客さんから苦情があつてさ。それを注意というかなんというか・・・

得意先の先輩として教えたんだけど、面白くなかつたみたいで」

『苦情』

投資商品の苦情であれば、元本割れしたとか、アフターフォローが無いだとか・・・

担当が誰であっても対象は『銀行』に向けられる。

しかし、『担当者』個人への苦情である場合は大問題だ。

今回は、かなり高い確率で後者なのだろうと予想することが出来る。

「苦情というのは、どのような内容でしたでしょうか・・・」

「ああ、男と女の問題でさ・・・」

・・・最悪の展開だ。

天照（前書き）

今週は都合により、金・土投稿になります
（・・・あやしい）

天照

『男女間の問題』なんて聞いてしまったなら、支店に出向かなくてはいけないだろう。

しかしながら、更衣室は依然として『天岩戸』状態なのだ。

『アマテラス』ではなく、『大魔神』が立てこもっている奇妙な『天岩戸』である。

電話では、男女間の問題なんて話だったが、電話でこの手の内容は、声を高くしては話せない事もある。

だから、「男女間の問題」が発生し、それが支店と矢部園子の間に、なんらかの障害となった事以外、詳細についてはわからなかった。

今すべき事は、支店に出向く事。

天岩戸から大魔神を燻り出す・・・もとい、

更衣室から矢部さんを連れ戻す事。

この両方を同時にしなくてはいけない訳だが・・・

「矢部さんは私がかしますから、代理は支店に行ってください」

お客さんの対応が終った佐藤はるかが戻ってきた。

僕の電話の内容を聞いていたのだろうか。

心配の表情を浮かべながら、バックオフィスの入口近くに立ちすくんでいる。

「・・・ごめん、君がいるの気がつかなかったね」

矢部園子が閉じこもっているのが女性用の更衣室ってのは、

男としては、なんとも出来ない『聖域』だ。

ここは、彼女に『アメノウズメ』になってもらうのが最善なのかもしれない。

「方法はまかせる。とにかく更衣室から出してくれ。

支店の女性達が更衣室を使えないって騒ぎ出したら、事が大きくなるから・・・」

「はい、ちょっと考えがありますから、まかせてください」

「支店に行ってくるから、さらに緊急事態の時は、また携帯に連絡して」

・・・さらに緊急事態になるのならば、連絡が来てもなんともならないだろう。

わかっていても、不安と大魔神を残してこの場を去る以上、蜘蛛の糸は残すべきだろう。

「F Aの田原です・・・」

支店では、僕達の混乱をよそに、普段どおりの『銀行』の景色があった。

まだ全員が、矢部園子が関わった『事件』については知らされていないのだろう。

銀行員のアンテナはそう感じ取っている。

「田原代理、二階の会議室に行こう・・・」

村田支店長と得意先の木田課長の2人が、僕の到着を待っていた。

お茶が出てくるまでの間、ふたりの顔色をうかがう限りではあるが、

怒りの感情は微塵も感じ取ることは無かった。

知り得る限り、電話の相手は誰だったにせよ、失礼極まりない対応はしているのだ。

直属ではないにしても、銀行の上司である。電話越しでも、許されるべき行為ではない。

「大変しつれいな対応をしたと報告を受けました。申し訳ございません・・・」

事情がどうであれ、まずはそこから始めるのが筋だろう。

「いや、失礼な対応をしたのは、こちらかもしれないね・・・」

「男と女の問題って伺いましたが、電話ではなかなか詳しく聞けなくて・・・」

最初から今回の件をお願いしたいのですが」

「まったくそのとおりだ。実は苦情の電話が来たことから今回の件は分かったんだが・・・」

苦情の電話であるならば、お客から矢部園子に対しての『苦情』であることは、

間違いないだろう。

女を使ったセールスはするなど、あれ程うるさく言っているのに・・・

「本社からもF Aとは帯同にて訪問してほしいと依頼されているのは承知している。」

しかし支店もギリギリの人員でまわしているからね・・・

矢部君には単独でアフターフォロー訪問をお願いしていたんだ。

もったも、問題のある先は頼んでいないし、

ファーストアプローチは得意先帯同で挨拶したお客ばかりなんだが・・・」

「その単独訪問していたお客様からの苦情ですか？」

申し訳なさそうに僕を見つめる木田課長が重い口を開く。

「ああ、二度と来させるなと凄い勢いでさ・・・」

僕も得意先の経験があるが、二度と来るなっていう苦情はあまり聞いたことが無い。

自分のことではなくても、部下がそのような事を言われるだけでも悲しくなる。

「どのような失礼な事を仕出かしたのでしょうか」

支店長と、木田課長が目と目を合わせる。

「あるご夫妻へのアフター依頼だったけど、奥さんが入院しちゃってね・・・」

旦那さんだけになったところに、繰り返し訪問してさ、それがご近所で噂になって、

奥さんの耳に入ったらしい。奥さんからの苦情なんだ」

確かに、奥さんが不在の時に旦那さんの所に行くのは注意が足りなかったかもしれない。

こちらにそのような下心はなくても、ご近所で噂になるくらいだ。

長い時間滞在していたとか、訪問頻度が高すぎたとか・・・

噂になる火種を撒いていたのかもしれない。

「こちらもそういう事は想定していたから、

そういう顧客層への訪問は、お願いしなかったから驚きでさ」

「・・・でも今回の苦情というのは」

「旦那さんの年齢は80歳越えているし、奥さんだって79歳なんだよ・・・」

・・・何に怒っているのだろうか？

嫉妬

「・・・すいません、確認ですがその79歳の奥様からの苦情で、間違い無いんですよね」

「79歳の奥様から、いわゆるジェラシーの申し出だ・・・」

いくら近所で騒がれたとしても、80歳を超えた旦那に対して、なにか間違いがあると思っているのだろうか？

奥さんが入院中で、ひとり寂しく自宅にいるのならば、

若い独身の女性銀行員が尋ねてくるのだ。喜んで自宅に招き入れるはずだ。

僕達だって、こういうケースは想定していた。

しかしながら、80歳のおじいさんは、我々でも警戒に値するケースではなかった。

「・・・申し訳ないですが、本件で矢部が非難されるのは、不可抗力だと思います」

「もちろん、矢部さんの努力は評価している。けれども、行動に対する結果が裏目に出た。そ

して、お客が不快な思いをしたというならば、

それは『苦情』と対処なくてはいけないんじゃないかい・・・

「・・・ごもつともです」

支店長の理屈は理に適っている。適っているのだけでも、

FAを預かる僕としては、やるせない気持ちだが、心の奥底からあふれ出してくる。

苦情申し出をされたお客様へは、

木田課長が、ご迷惑とご心配をおかけした事を謝罪訪問してくれていた。

退院されていた奥様同席で、バツの悪い旦那さんとも面談したとの事。

「今すぐ担当を変えろって、すごい剣幕だったから、田原代理の名前出しちゃったよ」

「それは問題ないですけど、矢部がとりみだした電話は、どんな内容でしたでしょうか」

「・・・まあ、親切が仇になったケースだって事で、大事にしたいくは無かったからさ・・・」

苦情の申し出があった場合、支店や本社では、

速やかに『コンプライアンス部』に報告する義務がある。

顧客や苦情対象の行員名も全て実名で報告される。

場合によっては、コンプライアンス部が直接お客へ出向く場合もあるし、

対象の行員の面談もある。

いくら善意を持って対応しても、結果が苦情となれば報告の対象となるのだ。

もちろん、その行員にとってプラスである事はまったく無い訳で・

「情報は一方通行だからね、矢部さんの話も聞きたくてさ。

昨日は会議で忙しいって事だったから、今日来て欲しいと頼んでたんだ。

『何の用事か』って結構厳しく言われたんで、つい『お客から苦情が出た』

って言っちゃってさ・・・」

朝から相談プラザにいた理由は、これだったのか。

行くに行けなくなったのには、理由が存在していたのだ。

「さっき、何で来ないのかと聞いていたら、ごちゃごちゃ理屈を言

い出してね。

まずは支店に来て欲しいって事を言っただけで、興奮させてしまったらしい」

僕としては、矢部本人に話をする前に、僕へ内容を教えて欲しかった。

でも、支店が僕へ話をしなかった理由も察することが出来る。

正式な『苦情』として対処するか否か。

出来る限り回避してあげたいという気持ちも見えるのだ。

FAの存在は、銀行の歴史でも新しく生まれたものだ。

皆が手探りの状態で、FAという仕事を作り上げてくれているのだと、

感謝と感動と、そして少しばかりの後悔とが、僕の心を駆け抜けていく。

どんなに僕や支店の人達が彼女を守ろうとしてくれている、

矢部園子を救えなかった事実には代わりは無い。

「僕もそのお客様にお詫びとご挨拶行ってみたいのですけれども．．．」

「そうしてくれるとウチの支店も助かるよ」

こうして木田課長とともに、苦情申し出のあったお客様宅に訪問することになった。

「あんたが、メス猫の上司か？まったく、

ご近所にヘンな噂が立っちゃってどうしてくれんのよ！」

本当にこの人は入院していたのかと不思議なくらい怒りのパワーは凄まじかった。

「ちょっと2週間ばかり留守にしている間、メス猫何回ウチに来ているか知っているの？」

「はい、訪問したお客様の事は、全て私に報告が参ります・・・」

2週間に5回の訪問は、2日に1回の頻度である。

その数字だけを追うのならば、たしかに非常に多い数字である。

しかしながら、訪問のたび運用商品のチャートであるとか、

他の商品の説明をして欲しいなど、宿題を渡してくれたのは、誰あろう旦那なのだ。

ダンマリを決めているのか、都合のよいボケ老人を演じているのか、一言も喋らない。

真相はどうであれ、男と女の関係に年齢など関係が無いって事を、

強烈に教えてもらった事は忘れないだろう。

「あんたも何とか言ってやりなさいよ！」

・・・僕も何か聞いてみたい。

「ああ、なんだっけ？」

「なんだじゃないでしょ、おじいさん！騙されたとか言ってやりなさいよ！――！」

興奮して血圧でも上がったのだろうか、ぶつぶつ呟きながら、奥さんが席を立った。

「・・・あんた達、今回の件は悪かったな」

突然ボケ老人が動き出した。

【しゃっきーん】

耳の奥でそう聞こえる（おいおい・・・）

「いや、若い娘っ子がくるんだから嬉しくてね。それに、よく食べてくれるんだ、あの娘。」

来るたびに菓子買って待ってたんだけどな、領収書はあさんから見つかったの。

隣のばあさんからつまらん事吹き込まれたらしくてあの通りで・・・」

その後、部屋に戻ってきた奥さんに改めてお詫びをし、

今後は田原が担当だとお願いし了承された。

「やっぱり銀行員は男でなくっちゃ・・・」

そういう考えは、まだまだ世間は圧倒的なものかもしれないな。

僕が導くF Aの道のりは、想像より遥かに険しいらしい。

玄関を出て、すぐ僕がしたことは、メールの確認だった。

着信の合図があったが、お客さん対応では確認も出来ない。

だから、メールでの連絡事項の伝達は都合がよいのだ。

【連絡：矢部園子、更衣室から出てきました】

出てきたのは、アマテラスか大魔神か・・・

嫉妬（後書き）

日曜は温泉に行つてまいります

甘味

苦情として処理するのか否か？

支店に戻った木田課長と僕は、支店長に旦那さんの状況を説明した。

「・・・まいったねえ。ご夫妻で白黒分かれているってのは」

それも困る要因であるけれども、僕には「よく食べてくれた」という一言が気になった。

常識を超える飲食の提供と言われてもしょうがない食いつぶり。

お菓子を食べてくるだけではなく、持ち帰り用の手土産もあったのではと心配になる。

「苦情処理としよう」

そう支店長が決定した時、僕も課長もうつむき加減の頭を、さらに下げる事となる。

誰もが単純に出した結論でなかった。

苦情処理となれば、報告は全て実名で記録される。

加えて、苦情コンプライアンス事例として、全支店に報告もされるのだ。

さすがに支店への報告は名前を伏せられ、【A支店のB行員が顧客
Cより苦情を受ける】

などと、何処の誰だと推測されないようにはなるのだけれども、
銀行内部の噂ってヤツは、僕に子供が出来たって事がそうであった
ように、

あつと言う間に広がってしまう訳で・・・

更衣室から出てきた矢部園子にもこのことは伝えなくてはいけない。
興奮冷めやらぬ状況が予想されるのだ。

はたしてどのような言葉を使えば彼女を納得させられるだろうか。

【更衣室から出で来る条件をつけてしまいました。ごめんなさい】
そういえば、佐藤はるかから、矢部園子が出てきたことを知らせる
メールの最後は、

このような言葉が綴られていた。

「条件ってなんだよ・・・」

『いらっしやいませえ〜3名様・・・4名様ですねえ』

福山Aホテル1階にあるラウンジでは、ランチタイムが終了してから、

ケーキバイキングが開催される。

コーヒー・紅茶お代わり自由で1480円だ。

僕は、甘いものは嫌いではない。

嫌いではないが、バイキングに行つてまで腹いっぱい食べたいと考えたことなど無かった。

「すみません、田原代理。矢部さんここに来たいって言つてたの思ひ出して・・・」

ダメもとで『田原代理が連れてつてくれる』って言つて見たら、

すぐに更衣室から出てきちつて・・・」

「まあ、しょうがないさ。あのまま引き込まれたらもつと大変なことになるからね・・・」

まずは、トラブルの経緯を聞くことよりは、彼女の機嫌をとることと、

苦労かけてしまった、佐藤はるかへのお礼もかねて、

ちょっと仕事をサボる事もいいのかもしれない。

苦情を受けた旦那も「よく菓子を食べてくれた」と言っていたけど、

よく食べるFA達の中で、矢部園子は甘い物専門なのかもしれないな。

しかし……

「田原代理、あそこの席にしましょう。ケーキ取りに行くの近いから」

……なんで貴様がいるのだ、宇宙人め。

佐藤はるかが同席するのは良しとして、タイミング良く現れた宇田川主任も、

この『ケーキバイキング』なる反省会に参加しているのだ。

「……クチバシ長いって言われたこと無いか？」

思わずそう呟いてしまうと、

「エコの為に、My箸もって歩いてるんです。なんで田原代理知ってるんですか？」

……すまんが、ケーキは箸で食べないでくれ。

肝心の矢部園子はというと、一度も僕と目を合わせることの無いまま、

僕の車の後部座席へと乗り込むと、あれを食べたいとか、あれが美味しいとか、

到着するまで、ひたすらしゃべり続けていた。

まるで僕がしゃべる時間を与えないかのように。

「あれがここのお勧めなんです」

全長1mのチョコレートファウンテン。

竹串に、イチゴやらメロンなんかをこのファウンテンの中に突っ込めば、

ドロっとしたチョコレートでコーティングされる。

席に戻るころにはパリっとしたチョコレートに固まるのだ。

その他にも、ショートケーキやイチゴを奮段に使ったムースや、

チーズケーキ・チョコレートケーキ等々・・・

目移りしてしまうほどのケーキが所狭しと並べられている。

「田原代理も負けないで食べてくださいね」

そうし言われても、見てるだけで腹いっぱいになるお嬢様方の食いつぶりに圧倒されて、

なかなか次のケーキを取りに行こうという気力が出てこない。

それに、ケーキなど食べている場合ではない事も、重々承知してい

る。

矢部園子だってそう思っているはずだ。

まあ、『ヤケ食い』と言うこともあるのだろうけれど、

全く忘れてケーキに没頭できるとすれば、僕と彼女は性別だけではなく、

まったく違う『銀行員』という存在なのかもしれない。

そんな『銀行員』に、これから僕は『苦情』に対しての説明をしたところで、

彼女は僕の考えを『理解』してくれるのだろうか。

そんな思いは、僕のコーヒーをますます苦いものへと変えていく。

「・・・そういえば、紅茶もあつたなあ」

僕はコーヒー嫌いなんだって事を忘れていた。

1480円の元がとれているのは間違いないだろうと思ったとき、

矢部園子が下を向いたまま動かないことに気がついた。

「矢部さん？」

頬に涙が伝わっている。

泣くほど悔しい出来事だったのだと、無言の彼女からのメッセージ。

この涙が、僕から伝えなくてはいけない事の『理解』が可能であることを教えてくれた。

「矢部さん、泣くほど美味しいよね、このチーズケーキ」

・・・宇宙人は黙っててくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8331f/>

続・銀行員の恋

2010年10月14日01時34分発行